様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０３０２

研究課題名（和文）未発表長編を基盤とする１９－２０世紀転換期マーク・トウェイン像の再構築

研究課題名（英文）Reconsidering Later Mark Twain from the Perspective of His Unpublished Novel

研究代表者
里内　克己（SATOUCHI, Katsumi）

大阪大学・言語文化研究科（研究院）・准教授

研究者番号：１０２１５８７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：トウェイン晩年の未発表作品の中で最も取り上げられることの少ない長編『それはどっちだったか』Which Was It? (1899-1906)を日本語に訳出しつつ、同時期のトウェイン作品群や別の書き手の作品と突き合わせることによってその意義を探った。その結果、この小説はこの作家の盛期と晩年を繋ぐような主題群を盛り込んでおり、無視して差し支えない作品であるどころか、トウェインの隠れた代表作と呼んでも過言ではない位置を占めることが明らかになった。また、作品が執筆された時期のアメリカ合衆国の多人種的・多民族的な様相をより深く理解するうえでも、『それはどっちだったか』が重要な作品であることも解明された。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I tried to elucidate the importance of Which Was It? , a novel-length story which is one of the most underappreciated among Mark Twain's later writings. For this purpose, I closely analyzed this story while translating it into Japanese language. In analyzing the story, I also referred to Twain's other tales and autobiographical essays and sketches, as well as to other related materials written by his contemporaries. As a result of these examinations, I found out that Which Was It? has many important motifs characteristic not only to Twain's last years but also to his height as a writer. Moreover, I demonstrated the further significance of Which Was It? by showing that it gives us deeper insight into intricate multi-racial (or multi-ethnic) aspects of U.S. society during the late-nineteenth and early-twentieth century.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：マーク・トウェイン　未発表作品　19-20世紀転換期アメリカ　自伝　作家の晩年

１．研究開始当初の背景

マーク・トウェインについては、『ハックルベリー・フィンの冒険』(1885 年)などを書いていた盛期と比べ、晩年期は厭世的な考えを持つようになったことが従来から指摘されてきた（例えば、1973 年に出版された Hamlin Hill による伝記 *Mark Twain: God's Fool* など）。だが同時にこの晩年期は、反帝国主義連盟に参加して発言するなど、トウェインが政治的な主張を盛んに行っていた時期でもある。この作家の晩年期を「ペシミズム」の一言で形容するだけでは不十分であることは明らかであり、必ずしも厭世的傾向を示さない作家の多様な面を指し示す伝記的著作が、近年では現われつつある（例えば 2010 年出版の Michael Shelden による伝記 *Mark Twain: Man in White* など）。21 世紀に入って、アメリカをはじめとする海外においては、マーク・トウェイン晩年期の自伝的事実の掘り起こし作業とそれに基づく作家像の精緻化が近年になって急速に進んできており、2010 年から刊行が開始された完全版『自伝』の登場によって、この傾向はますます強まっていくと予想される。しかし一方、このような成果も視野に入れつつ、この時期にトウェインが書いた作品を丹念に分析する研究は大きく立ち遅れており、検討の素材として取り上げられていない作品がまだ数多くあるのが現状である。その最たる例が、本研究で取り上げることにした『それはどっちだったか』である。

この作品は、John S. Tuckey がトウェインの遺稿集として 1966 年に出版した *Mark Twain's "Which Was the Dream?" and Other Symbolic Writings of the Later Years* のなかに収められており、600 頁を超える大部なこの作品集の三分の一以上（約 250 頁）を占める。ところが、ほとんど長編にも匹敵する分量であるにもかかわらず、これまでこの作品をある程度掘り下げて論じた研究者は、私の調査の範囲内では Arthur G. Petit (1974 年)と Susan Gillman (2003 年)の二人だけである。しかも、この二人は作品全体を論じるというよりも最終部だけに焦点を合わせており、原型となる短い作品「インディアンタウン」については論じていない。アメリカの *The Mark Twain Encyclopedia* (1993 年)や *Critical Companion to Mark Twain* (2007 年)、そして日本の『マーク・トウェイン文学/ 文化事典』(2010 年)といった、この作家に特化した国内外の文学事典をひもといてみても、この作品を扱う項目が見当たらないばかりか、言及されることすらほとんどないという状態である。伝記的事実の発掘が進むのとは裏腹に、トウェイン晩年期の作品研究には非常に大きな空白が存在し続けているというのが、研究開始当初の状況であった。

２．研究の目的

文学者マーク・トウェインが最晩年（19－20 世紀転換期）に書いた作品群を、同時代のアメリカや世界の情勢のなかに置きつつ再検討する。検討にあたっては、これまで全くと言っていいほど認知されてこなかった未発表長編小説『それはどっちだったか』*Which Was It?* に焦点を当てる。この長編自体を訳出しつつ、ほぼ同じ時期に発表された短編、死後出版の人間論、帝国主義批判の記事、南部小説、そして 2010 年より無削除版が刊行され始めて話題を呼んだ『自伝』など、多様な作品群との繋がりを探る論考を発表する。これまで知られなかったトウェインの思考の軌跡を解明すると同時に、それと密接に連動した世紀転換期の複雑な社会の様相を浮き彫りにすることも目指す。

３．研究の方法

（１）長編小説『それはどっちだったか』およびその原型になった短編「インディアンタウン」を、集中的に精読・訳出しつつ緻密に分析し、各作品に盛られたトウェインの思考や主張を抽出する。この作品に様々な角度から光を当てる論考を発表し、それを積み重ねることによって最終的に、この長編小説がトウェイン作品群においていかなる位置を占めるのかを論じた長い解説を完成させる。日本語に訳出した小説にこの解説を付して出版する。

（２）『それはどっちだったか』が書かれたのと同じく晩年期に書かれた他のトウェイン作品、とりわけ完全版の『自伝』を分析することによって、19－20 世紀転換期におけるトウェインの思考を、作品論に留まらない幅広い見地から考察する論考を発表する。また、同じ時期に活躍した別の書き手の作品も参照し、トウェインとの関連性を視野に置きつつ考察する。そのような論考が明らかにした知見を参照して、〈１〉に述べた『それはどっちだったか』の作品分析にも組み込む。

４．研究成果

上記「研究方法」において述べた二点に対応させる形で研究成果について説明したい。

（１）本研究の主たる分析対象であるトウェインの *Which Was It?* については、少しずつ日本語への訳出作業を進めてきたが、その成果を最終年度内に翻訳書『それはどっちだったか』として刊行することができた（2015 年 3 月、彩流社より出版）。この報告書を書いている時点では出版されたばかりであり、書籍の受容のされ方を見届ける段階ではない。だが現在のところ、全国の図書館から大口の買い取り注文があり、新聞書評でも現代性を有した非常に優れた作品であるという評価が与えられている（2015 年 4 月 26 日付「朝日新聞」読書欄）。『それはどっちだったか』という作品の魅力が一般に広く知られ、トウェイン作品の中で異色ながら重要な小説であることが認知されるならば、今後は国内外での学術研究にも少なからぬ影響が及ぶだろう。完全に黙殺されてきた状態が反転して、しかるべき評価が与えられていく可能性が大いにある。

この翻訳書には、400 字詰め原稿用紙にして 70 枚程度の長めの解説をつけた(435-72 頁)。これは、『それはどっちだったか』がトウェインの作品群のなかでどのような位置にあるかを明らかにすることを主眼にした解説である。簡潔に主旨をまとめると、『それはどっちだったか』は、『ハックルベリー・フィンの冒険』(1885 年)や『まぬけのウィルソン』（1894 年）といったトウェイン盛期の作品群の延長線上にある小説であるという捉え方がまずできる。南北戦争前の南部が物語の舞台となり、当時行われていた奴隷制が背景の重要な一部となるのが、盛期の作品群の特徴である。『それはどっちだったか』は人種問題の扱い、とりわけ異人種間の複雑な関係性という点で、そうした過去の自作を引き継ぎながら更に一歩踏み込んで書かれている。とりわけ『まぬけのウィルソン』からは、人間の二面性といった主題や、舞台設定や人物造形など、多くの要素が借り受けられ、深められている。トウェインの〈南部〉探究の頂点として一般に捉えられている『まぬけのウィルソン』だが、この解説において私は、評価の高いこの作品は、『それはどっちだったか』を書くための準備作業にすぎず、未発表ながらさらに晩年に書かれた『それはどっちだったか』こそ、トウェインのいわゆる〈ミシシッピもの〉の最後にして最重要の作品であるという新しい見方を示した。

『それはどっちだったか』はアメリカにおける人種間の葛藤を素材にしたトウェインの試みの到達点として位置付けられる。だがその一方でこの小説は、晩年に書かれた知名度のあるトウェイン作品(「ハドリーバーグを堕落させた男」『人間とは何か』『不思議な少年、第 44 号』など）とも密接に関連している。上記翻訳書の解説において私は、このような人種の主題から背を向けて書かれた作品群の主題やモチーフを『それがどっちだったか』がどのような形で共有しているかを詳細に検討し、解説した。それによってこの未発表小説は、トウェインの〈人種〉に向ける関心が薄れ、より普遍的な〈自己〉に対する興味の比重がより高まっていく最晩年の作風を予告する、過渡的な位置にある作品であるという結論を出した。さらに解説の終りにおいて私は、『それはどっちだったか』のための習作として書かれた一連の作品、とりわけ短編「インディアンタウン」へと論を進めた。トウェイン自身を彷彿させる人物が登場するこの作品は、従来自伝的であるがゆえに作品としての完成度が低いと見なされてきたのだが、長短編の舞台となる田舎町がどうしてインディアンタウンと命名されているのかという謎を解き明かすうえで、この短編は重要な鍵を提供している。前身作品である「インディアンタウン」と重ね合わせて読むならば、『それはどっちだったか』という長編は、マーク・トウェインという作家の私的な歴史と、白人・黒人・先住民が複雑な葛藤を繰り返してきたアメリカ合衆国の歴史とが切り結ぶ地点から生み出された、特異な作品としての姿を現すことになる。そのように結論づけて私は解説を締めくくった。

なお、『それはどっちだった』における奴隷制表象の特徴を、チャールズ・ディケンズの旅行記『アメリカ紀行』を参照しつつ分析した研究報告を、最終年度の前半に行う機会を持つことができたが、それが上述の解説文を完成させる大きな助けとなったことを付記しておく。

（２）本研究では、『それはどっちだったか』と同時期に書かれた晩年のトウェイン作品にも目配りをしつつ分析を進めていったが、その際には、同様にかなりの分量を持ちながらもこれまで分析の対象となることのきわめて少なかった未発表小説『落伍者たちの避難所』*The Refuge of the Derelicts* に最大の重点を置く方針を立てた。『それはどっちだったか』と比較しつつ、『落伍者たちの避難所』や同時期のトウェイン作品から読み取れる〈老い〉に対するトウェインの意識を浮き彫りにする論考を、まず日本語で発表した。『落伍者たちの避難所』をはじめとするトウェイン晩年の作品においては、多くの場合、〈不運との遭遇による人の老い〉という主題の下に、人間という存在の位置づけが、科学的な観点から、そして宗教的な観点から捉え返されている。そして、世紀の変わり目の中で老いゆくことは、作家としてのトウェインに、個人としての人の生と、種としてのヒトの歩みとを重ね合わせ、その在り様を高みから眺望する立脚点を与えてくれた――それがこの論考の結論となった。更に私はこの論考を基にして、アメリカで開かれたマーク・トウェイン国際学会で英語による発表を行い、更に英文版論考をトウェイン協会機関誌の英文号に掲載することによって研究成果を海外に発信した。

『それはどっちだったか』『落伍者たちの避難所』両テクストの分析に際して、執筆当時のトウェインの伝記的事実や考えを知る重要な資料になったのが、全 3 巻で現在第 2 巻まで刊行されている完全版トウェイン自伝を大いに参照した。『自伝』第１巻については『英文学研究』に詳細な書評を発

表することができたが、それを契機として、同じ時期に刊行されたヘレン・ケラー『私の人生の物語』*The Story of My Life* や W.E.B. デュボイス『黒人のたましい』*The Souls of Black Folk* といったマイノリティに属する人物の自伝的テクストにも考察を広げていった。ケラーは晩年のトウェインと親交を持ったことで知られるが、『私の人生の物語』の中での米西戦争への間接的な言及には、当時アメリカ合衆国の対外政策に批判的な態度を示していたトウェインの影響がある可能性を、論考において指摘した。また、世紀転換期アメリカを代表する黒人指導者デュボイスに関する論考は、トウェインと直接のかかわりを持つものではないが、『それはどっちだったか』に示されている世紀転換期アメリカ社会における主流側の人種意識や米西戦争に対する態度を、マイノリティの側から批判的に捉え返す試みとして、本研究に貢献する成果に数え上げることができる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３　件）
・「Harriet Elinor Smith, et al. (eds.), *Autobiography of Mark Twain, Volume 1* 書評」　『英文学研究』第 89 巻（2012 年 12 月）pp.89-94.
・「〈惑星思考〉の W. E. B. デュボイス――『黒人のたましい』と以降の思想・表現」『大阪大学言語文化共同研究プロジェクト 2012　コミュニケーションと文学　III』2013 年 5 月　pp.13-24.
・「On Twain's Late Style: Growing Old in "The Refuge of the Derelicts"」*Mark Twain Studies*, Vol.4, pp.68-79.（2014 年 10 月）

〔学会発表〕（計　５　件）
・老境のマーク・トウェイン――『落伍者たちの避難所』を中心に」京大英文学会年次大会（京都大学）2011 年 11 月 5 日
・「〈奇跡の人〉の文学――ヘレン・ケラー『私の人生の物語』(1903 年)を読む」日本英文学会関西支部大会（京都大学）2012 年 12 月 22 日
・シンポジウム「21 世紀世界における惑星的想像力――response/ responsibility/ acknowledgement の連環」講師　日本英文学会第 85 回大会（東北大学）2013 年 5 月 26 日
・On Twain's Late Style: Growing Old in "The Refuge of the Derelicts"　Elmira 2013: The 7th International Conference on the State of Mark Twain Studies (Elmira College, NY) 2013 年 8 月 2 日
・シンポジウム「『アメリカ紀行』を手掛かりに」司会兼講師　ディケンズ・フェロウシップ日本支部/ 日本マーク・トウェイン協会合同大会「ディケンズとトウェイン――交流する二人の作家」（明治大学）2014 年 6 月 21 日

〔図書〕（計　３　件）
・金澤哲編著『アメリカ文学における「老い」の政治学』（松籟社）2012 年 3 月（分担執筆:「老境のマーク・トウェイン――「落伍者たちの避難所」を中心に」pp.29-53.）
・入子文子監修、谷口義朗・中村善雄編『水と光――アメリカの文学の原点を探る』(開文社出版）2013 年 2 月（分担執筆：「光を得るヘレン・ケラー――『私の人生の物語』における自己形成と社会意識」pp.179-200.）
・マーク・トウェイン著、里内克巳訳『それはどっちだったか』（彩流社）2015 年 3 月

〔その他〕（計　２　件）
・「エルマイラ報告――第７回マーク・トウェイン研究国際会議に出席して」『マーク・

トウェイン――研究と批評』第 13 号（2014 年 4 月）pp.95-96.
・「マーク・トウェイン〈新作〉？の魅力」彩流社 HP コラム「ほんのヒトコト」第 30 回 URL: http://www.sairyusha.co.jp/honnohitokoto/30satouchikatsumi.html
2015 年 3 月

６．研究組織
(1)研究代表者
里内克巳　（SATOUCHI KATSUMI）
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号：10215874